

要点『日本文化原論永続思想主体性学』

ご挨拶

1) 真のグローバルスタンダード

1-1 理念・目的

個々の体験を重ね反省と改善の持続する精神性の稼働において、人間の健全な精神性を動力源として出現する活動法則の見解が抽象集約される。確かな基盤原理を確立し、他空間への適正を示し良性の広がりを目指す哲学文化政策が形成される。真のグローバルスタンダードを作り人類の利益を増進させるビジョンに集約される。

1-2 今日的な不健全性

支離滅裂な論理と表現を多産させ虫食いの利己的利益を求める性質が増加する。確たる原理や領域観の形成と保有の乏しい一過的粗雑な生の導出による自存性を高める歪な根源性と根幹性が浮かび上がる。人間の精神性の劣化と実感される。物質依存性の強い習慣による精神性と身体性の弱まりが、言葉や概念、領域観の形成を貧祖化させ予めの基準尺度の整備が不十分なまま観測と評価と表現を起こし歪な態度を持って生存に連ねる精神不良という心象が進む。各種メディアでの露出を高め肩書に依存し中味の希薄な創造に陥る習慣の崩れた性質が顕在化する。近代化や物理文明の潮流と功罪の認識が整理され、適正像の導出へ及ぶ。

1-3 主体性の一般原理

根源性と根幹性の程度の悪い習慣性が言葉や表現の産出の質実反映される。人間の内面性が外形性となり性質の検証に至る。慢性的な詐欺や盗み、略奪的な性格の人間性の実感が進む。確かな過程を重ね精神と身体と観念の有機的な活動法則を経て質実の良き言葉や概念、領域観を産出する事へ至る。基軸性の尺度を備え対象の選択と観測と評価予測に及んで最良的方法の考案と稼働と検証と反省や発見と改善を持続させ変わりづらい人間性の良質が存続する。自己生産性の範囲を精査し予めの基準を整え個別現象の対面と評価と施策の提起と

稼働に及ばせる健全な心身と観念の相関を有する人間像の形成と実践の創造性が表される。

1-4 根源且つ根幹と基軸の適正

空間の主導性を担う人的資質の程度が全体の性格へ連なる。根と軸が悪化すると、長期性の軌道から外れた負の現象と連鎖性が広がる。堂々とした精神性を基軸に備え、万人に向けて健全な生態と永続を求める表現と創造性が推進される。

2)永続思想 主体性学

2-1 保守とリベラル

「保守とリベラル」という政治思想に対し、産業経済性の観点を含めて人間の性格や志向の実際を掴みだす事に及ぶ。直接的な皮膚感覚の因果性の高い衣食住等の需給活動の中で、安く良いものという発想が進む。誰から何を買い社会関係を作るという発想からいかに安く良い物を手に入れるかといった経済合理性が進み、地域社会の密接な関係性が弱まり、経済合理性による自由な利益や成長を望む発想が広がる。地域社会の歴史や繋がりを重んじる保守と物質合理性による自由な消費生活を望むリベラル等という社会性となって、政治的な側面での思想が抽象化される。

動的 静的	感性的・精神的	感覚的
	産業経済面	地域社会の繋がり
政治行政面	保守	リベラル

2-2 産業経済性と政治行政

経済合理性の高まる刺激を作り上げる供給者の出現が増し規模の合理性によって安く良いものを提供し需要側もそれを望む感覚的効用面の欲求で支配されて個々人的な利益と成長を求める自由主義の社会性が形成される。一方で地域の密接な関りを重視し感性面の欲求を意図して誰から買うという面に基準を備え社会性を遂げる保守等という性格の違いが認識される。物理感覚の高まる効用と因果性が強まり個々人の分断的な性格が進み物質面の因果性に支配される体質が作られる。こうした性質の変容についてあまりに物質性の強まる精神性の喪失に陥る事への対策や予防の観点が起こり適正な規制を形成し地域社会の精神的な統一や一体性を望んで政治や行政なる働きと特徴が出現する。産業経済的な合理性を求める性格の領域と因果性の出現に対しそもそもの政治行政領域における社会性を求める基本的

な性格や規制を設ける事の意味が確認される。

2-3 物質文明の潮流の増進

「早く安く良いもの」という経済合理性の潮流が高まり、規制緩和と自由競争の流れが拡大し、規模の合理性を持って安く良いものを遂げる需給性を果たし経済上の優位性と生存を遂げる基調が増し物質文明なる性格の産業経済性に支配され政治行政面の基本的な役割を見失う。政治行政も自己の生存性に意識が高まり規模の合理性や経済合理性の因果で支配され、そもそもの役割の認識が弱まり自存に偏った態度に及んで政治行政の特色に対する認識が変容する。経済合理性の基準による社会性の基調を定常性とするならばそもそも政治行政領域の存在意義は失う。政治領域の存続のための政治をやる態度が強まる。基本的な意義がなくなり自らの生存の為に権力を暴走的に活用される。

2-4 教育研究

産業経済性と政治行政領域の基本的な性格について冷静な分析を重ね人間や生態の変わりぬ良質への見解を起し、あるべき姿を引き出しながら現況の観測と性格の認識が起こり、変わりづらい尺度から映る過不足性の評価に及んで、あるべき姿へ及ばせる発想や原論が出現し教育や哲学文化等という領域の意義や働きの特色が形成される。

2-5 哲学文化

「産業経済性、政治行政、教育文化」という3つの主要な領域と相関について身体と精神と観念の相関という人間と生態の根源且つ根幹の観点と適正を土台性に求め、各領域の基本的な性格と相関の体系として、人間像を基礎に備え空間の広がりや調和と持続の生態を作る精神性が稼働する。根本且つ全体性の観念を引き出し変わりづらい良質を求める哲学文化領域等という特徴を生む領域観が現れる。

2-6 思想・世界観

根源且つ大局性の概念や体系観となって、思想や世界観等といった長期性の尺度を引き出し、普遍的不変性の概念を整えながら、時々の諸状態の観測と評価と予測性に及ばせ、妥当な施策に連なる長期周期の創造観が作られる。各領域の本分等という面への関係と領域間のあるべき姿等という統合性の観念を集約させ、変わりづらい人間と生態の良質性を土台に持ち、生態の健全と永続の軌道を遂げる。どこか偏りの激しい領域観と実施の力が強まる現象に対し変わりづらい長期尺度を提示し人間と生態の根本的な性質の悪化が広がらぬ適正概念を

形成し価値基準の広がり浸透をもって自己制御性に及ぼせる原理が稼働する。

2-7 基軸性の尺度と過不足の体系

思想や世界観が萎み物質感覚で支配され、「早く安く良い物を」という価値観が高まる弊害性の認識が起こり長期性の尺度に価値の意識が出現し偏狭的因果性の強まりを補正させる作用が産まれる。長期性の基軸尺度の確立において過剰な効率と過剰な非効率という両極の人間性の崩れの認識が起こる。物質的効用感が所与のような感覚で支配され、精神性とのバランスが壊れた人間と生態を招く事の不健全性の認識が現れる。

両極的な歪性：領域の寡占制と領域の喪失と分散性

閉鎖性	基軸性	開放性
寡占的支配性	精神の健全性	分散的混乱
物質感覚の高まり	心身と観念の適正	物質感覚の高まり

3)成長と進化

3-1 基軸性

確かな基軸性の観点や概念が引き出されて変わりづらい人間と生態の良性を遂げる事に及ぶ。分化性と統合性の適正を求め人間と社会と自然と創造力による生態系の健全な姿を作り上げる感性が出現する。「封建制と近代制」や「社会主義と自由主義」という観念に対し、変わりづらい普遍的不変の基準を問い確かな土台的な基準尺度の確立を遂げ人間と生態の健全な動静と進化を表す概念が産出される。

3-2 予めの基準

適正な制約性の基準となり、予めの尺度を有し個別特定現象を作る基準と稼働性に至る。予めの尺度がないか、あっても妙な偏りの激しい世界観によるお粗末なリーダーによる主導性は人々を不幸にする。盗みや詐欺の性質が強い人間が大きな力を持つと狂った基軸性の乏しい一面的短調性の無機質合理性の世界を進める。根拠の希薄な効率と非効率の判断を進める哲学文化観の弱い不健全な制御を欠く態度と映る。「デジタル化」による身体的な関りの減少する人間性と社会性には大いに疑念を抱くのが適正と思われる。

3-3 基礎変数の適正と産業経済性と政治行政性

資源と人口、領土領空領海の適当性、供給と需要の均衡、産業経済的な自由主義を持って、

資源の不均衡性を解消に及ぼせる作為を強めるか。人口に対し適当な領域性を予めに割り振り産業経済の規模的合理性の自由を抑制させるか。基礎変数と要素性の適正を再編する観点が出現する。

3-4 精神と身体の相関と適正

力による支配という性格が強まらぬ「平和主義、法による統治、立憲主義と自由主義の関係、権利義務の適正、生産と消費と分配の適正循環、精神と身体の適正な相関」なる理性と論理に重心を備えた力と活用の精神性と制御性が存続し、人間と生態の健全と永続の問いと作為が重ねられる。身体的成長の観点に偏らぬ精神の成長を併せ持つ人間の特有的な内包性が作られる。哲学と科学と技術の適正に具象化される。成長と進化の中味や力の概念の適正が定まり生命観の健全性を遂げる。

3-5 不健全性と制御性、個性と同一性

頭と体が分断する習慣が作られるほどに内面性の歪性が増し内面と外形の異なりが強まる歪な精神の人間性が顕在化する。抽象と準抽象と具象の多段的観点と整合の悪い羅列的分断の表現が増す。過去への意識と未来の意識の割合感の適正等という面も加えられる。過去の精緻な研究に偏り、未来創造的な発想と態度が萎む事にもどこか精神面の不調が映る。頭過多と身体性過多という両極の観点を有し、頭と体と精神の有機的な規則性を標準にした基軸と過不足と制御が図られる。

3-6 分化と統合の適正と領域化

各種理念の前段に心身と観念の整合的有機の観点が土台性に入り内外性の一致を重んじる健全性が形成される。概念と感覚性との整合工程を経て精神性の実態が検証される。各種の個性が出現する事に対し、万人同一性の基礎の厚みをもって、個性の尊重と協業の社会性と公益性が稼働する。分化と統合の適正の観点が稼働する。

3-7 技術と哲学の両輪性

デジタル化やIT化は心身と頭脳の分断性を招く事への危惧が起こり方法の強弱や判断の適正を狂わせぬか。短要素性と規格均一、量的依存性の強まりへの警戒が内蔵され、技術力の適正な制御と活用に及ぼせる哲学や思想面を併せ持って技術の悪用に外れぬ力と活用を図り、健全な技術の発展を実現する。即効的な因果を求め人間の根源性の狂いを起こさぬ精神性が宿り根本的不動性の理念と稼働が続く。

3-8 寡占性と分散性

精神の健全性という観点を変わらぬ根源的基礎に持ち、寡占性と分散性という両極的精神の歪性に対し、根源性と根幹性と産出性(部分と全体)と習慣性という主体性や領域観の基本原則を備え、適当な「緊張と緩和」や「身体と精神」や「制約と自由」の優れた相関と周期を有する「永続思想」と「主体性学」という領域観と未来ビジョンが作られる。

3-9 精神性と外形化（表現や学術の産出性）

学術の体系や科目の名称の起こし方にも、精神性を反映した表現が産まれる。生物物理性の科目と割合が増し精神性や観念性の科目が少ない等というアンバランスを生む。或いは、「哲学と科学と技術」や「立案と実施と検証と改善」や「生産と消費と分配」という土台的な観念が崩れた創造観が産まれる。

3-10 成長概念の健全性

成長概念と中身の抱き方が生態の志向やビジョンと描かれる。あまりに歪な発想や感性が前のめる成長に外れると、正よりも負の性格が増し、短期的一過性の利益に偏った評価と判断と創造に回る。いつの時代にも変わりづらい人間と生態の適正像を問い、確かな納得と共感を引き上げ、普遍的不変の概念と揃える働きが要る。

4)本書の全体構成と目次

当該創造は良好な精神性を表す主体と生態の姿を導出する事にあります。個々の思索や施策を重ね集約概念を産出する事に意識を注ぎ表現を導出する活動が図られました。一部で概ね最終的な形が纏められます。

一 部	挨拶 真のグローバルスタンダード 永続思想と主体性学 成長と進化 本書の構成、目次	1
	1. 真のグローバルスタンダード	38
	2. 要旨	54
	3. 沿革と現況と方法、	64
	4. 集約編 人間の解明と創造	80
	5. 一編 創造性の範囲、	102
	6. 二編 人間学	145
	7. 三編 主体性原理と永続思想、	202
	8. 四編 哲学文化政策、	221

二 部	はじめに 一編 日本文化原論永続思想 二編 長期性の思想 三編 思想の要点、四編 実践性、五編 解説			239
三 部	文化構想 集約	纏め 一編 二編 三編 四編 五編 六編 七編	永続思想 哲学文化 文化文明観 精神性 生命観 人間と生態の健全と永続 哲学文化政策 人間と生態	437
四 部	文化構想 集約	八編 九編 十編	文化ビジョン 哲学文化政策総論 哲学文化政策	628
	文化構想 基礎と全体	十一編 十二編 十三編	要旨 日本文化原論永続思想 文化構想	
五 部	文化構想 各論	十四編 十五編 十六編	標準 文化システム 哲学文化政策	785
	文化構想 実践	十七編 十八編 十九編 二十編	文化構想 主体性原理 初動且つ無限の概念 文化概念の抽出	
	総合、動静概念、 根本性、静的概念、一部	二十一編	主体性原理	
	主要図表集			975
	著者履歴紹介	概要、詳細ブログ掲載		992
	あとがき			1053